

今日、世界が救われました

はるき
春木 のん

夕暮れのような赤い空の下。焼け焦げた大地へ突き刺さるように、大きな円い石盤が一枚、埋まっています。周りに人間がいないことを確認して、私はそれらに近づき声をかけました。

「トレビ、アンジエ」

大きな円い石盤のそれぞれには、私の手のひらほどの穴がふたつと私の頭ほど大きな穴がひとつ、彼女たちの目と口があります。片方の円盤の大きな穴から、くぐもつた声が聞こえました。

「ううつ、だれ？」

「ミグだよ、アンジエ」

「ミグ、ミグなの？どうしてこんなところに？危ないわ、離れていなさい」

「もうここは危なくないよ。私たちしかいない」

「そう、なの。ミグ、あなたひとりなの？エヴァと一緒にじゃないの？」

「エヴァとは、はぐれて。それつきり」

「そう。どこかで生きていればいいわね。トレビはもう話せないわ。あたしも長くないと思う」

私は着ていたポンチョを地面に広げました。ポンチョの内側は、赤、白、黄、緑、紫、青、と色のついたパレットになっています。筆のように毛で覆われた私の指にそのひとつひとつを染み込ませると、私はトレビの体に色を塗りはじめました。

「トレビは、最高のパートナーだったわ」

私がトレビに彩色を施していく様子を見ながら、アンジエは彼女の親友がいかに勇敢な戦士であり、心強い相棒だったかを話していました。トレビとアンジエは、ふたり一組で敵を挟み撃ちにしたり、ふたりの口から同時に発せられる超音波攻撃が得意でした。

「ごめんねトレビ。地面から出ている部分しか、お化粧できなかつた」

「大丈夫よミグ。彼女、すごく喜んでる。だって彼女まるで、お花畑の中にいるみたいじゃない」

トレビの体に無数の花が咲きました。お化粧の仕方はその子によろけれど、体が大きなトレビには、たくさん模様をつけることが良いように思えました。